

# 千石豆【ふじまめ】（ハウス・普通）

## 栽培暦

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
ハウス	— 播種		— 定植		————— 収穫						
普通	— 播種		— 定植		————— 収穫						

## 栽培の特徴とポイント

耐乾性があり高温にも強いが、低温にはきわめて弱い。生育適温は13～28 で、最適気温は23～28 である。土質に対する適応性は広いが、保水力のある壤土または砂壤土を好む。他の豆類と同様に連作を嫌い、また酸性に弱く、pH6.0～6.8が適する。

莢の収穫適期幅が短く、収穫、誘引、摘葉など手作業依存度が高いことから、労働力に見合った作付面積とする。（家族労力2人で7a以下）

## 品種

**芭蕉成ふじまめ（赤花）**：さやはやや硬いが、さやの変色が少なく、豊産種である。  
（在来種）

## 育苗管理

温床線を張り、播種床を作る。床温28 を確保してから播種する。温度が低いと発芽不良となりやすい。播種後の地温管理は発芽揃いまで28 、発芽後は25 程度とする。園芸用育苗箱に播き（条間5cm×種子間3cm：覆土1cm）、本葉の出始めた頃に12cmポリポットに移植する。ハウス1本仕立ての場合、予備も含めて2,500粒播種する。2本仕立ての場合は1,600粒、露地の場合は500粒播種する。

温度管理は最高28 、最低15 を目標に管理する。かん水は晴天日の午前中に行い、徒長を防ぐ。葉が重なり始めたら、鉢を広げる。

定植10日前頃から、徐々に最低夜温を下げ（10 以上確保）馴化する。

鉢ずらし後と定植前に病虫害防除を行う。

## 栽培管理

### 1 耕起および畝立て

基肥施用後耕起し、ハウス（間口5.4m）の場合、畝幅2.7mの畝を2本作り、定植の10日前頃には透明マルチを張る。露地の場合、畝幅2.0m程度の畝を作り、定植の10日前頃には黒マルチを張る。

### 2 施肥

生育初期は窒素肥料が多いと過繁茂、着花遅れ、落花となりやすく、反面、肥料が切れると莢の形が悪くなるので肥料切れに注意する。

施肥例(kg/10a) ハウス

肥料名	基 肥		追 肥		成 分 量		
					N	P	K
発酵鶏糞	150						
苦土石灰	140						
熔 燐	100					20	
硝加燐安333号	50	50			13	13	13
ミドリトップ	100	100			12	12	14
尿 素			50	50	46		
					71	45	27

\* 追肥の1回目はツルが1m位に伸びた頃、2、3回目は生育状況に合わせて行う。

施肥例(kg/10a) 露地

肥料名	基肥	追肥			分量		
					N	P	K
発酵鶏糞	150						
苦土石灰	140						
熔燐	60					12.0	
硝加燐安333号	70				9.1	9.1	9.1
尿素		10	10	10	13.8		
硫加	10		10				10.0
追肥時期		6/上	7/中	8/下	22.9	21.1	19.1

### 3 定植

定植前日に十分にかん水し、温暖な日に定植する

ハウス

- 1) 3月下旬～4月上旬頃に、本葉5～6枚で定植し、ハウス内でトンネルを行う。
- 2) 栽植密度は畝幅 270cm × 株間35cm (1本仕立て)、又は55cm (2本仕立て) × 条間50cm程度の千鳥2条植え、10a当たり2,100株 (1本仕立て)、1,350株 (2本仕立て)とする。

露地

- 1) 4月下旬～5月上旬頃に、本葉5～6枚で定植し、肥料袋やホットキャップ等で風除け・保温をする。
- 2) 栽植密度は畝幅 200cm、株間120cm (3本仕立て)、10a当たり420株とする。

### 4 支柱立て

ツルが20～30cm位に伸びた頃、2m程度の長さの支柱を立てる。横ヒモを張り、支柱が倒れないようにする。省力化のためにキュウリネットを使用する方法もある。

### 5 誘引、整枝、摘心等

- 1) 誘引は等間隔に行う。
- 2) 下位節3節程度の側枝は除去する。側枝は込み合わないよう2葉程度で摘心する。
- 3) ツルが誘引番線に達したら (約2mの高さ) 主枝をピンチする。ハウス1本仕立ての場合は1葉程度で摘心する。
- 4) 梅雨明け前にしきワラを透明マルチの上に置き、地温を下げる。

### 6 かん水、追肥

ハウスでは開花、着莢まではやや乾燥気味にして、着莢後から定期的にかん水 (夏場は7日間隔程度) し、追肥を始める。追肥は生育状況を見ながら尿素等を施用する。(露地も同様)

### 7 病害虫防除

- 1) ハダニ、スリップス、アブラムシ、ハスモンヨトウ
  - (1) ほ場周囲や畝間の雑草はハダニ等の発生源になるため早めの除草を行う。
  - (2) 害虫の発生に注意し、被害葉、果実は早めに除去する。ハウス内に青色や黄色の粘着板を設置する。
  - (3) 特に、ハダニ、スリップスは抵抗性がつきやすいので同一薬剤の連用はせず、ローテーション防除を行う。
- 2) 灰色かび病
  - (1) 施設内が多湿にならないように換気をこまめに行い、かん水を多くし過ぎないようにする。
  - (2) 古葉・枯葉は摘葉し、風通しを良くする。
  - (3) 被害を受けた果実等は、早期に施設外に出し埋没処分する。

### 8 収穫、選別

ハウスは6月初旬頃から収穫始めとなり、10月頃まで続く。露地は6月下旬から10月下旬まで収穫できる。午前中に収穫し、莢が硬化するまえに行う。収穫時に花房を傷めなければ再び着莢し収穫できる。

選別は、収穫時、大小選別時の2段階で行い、出荷規格を厳守する。また、虫害莢を混入させないように注意する。